

語ずつ分野番号と分野内の通し番号がついている。用語説明はなく、注釈欄には別称などが必要に応じて記されている。分野と用語数は次のとおりである。総論 (216), 植物形態学 (595), 植物解剖学 (449), 植物胚胎学 (261), 藻類学 (134), 真菌学 (395), 地衣学 (77), 蘚苔植物学 (40), 植物生理学 (374), 植物化学 (170), 植物生態学 (333), 植物地理学 (94), 古植物学 (73), 胞粉学 (93)。植物学の現況からみて、生理や化学の用語が、他にくらべてずいぶん少ないように思うし、実際、新しい用語はのっていない。遺伝学という分野は見当たらない。これが中国の現状だとすれば、ちょっと首をひねりたくなる。わが国と同様、新展開している分野の用語は消化する暇がなく、原語にそのまま漢字を当てて苦労しているようだ。この点わが国の片カナというのは便利な文字だと思う。一方、現在は使われていない用語もかなり含まれている。巻末に華英索引と英華索引がある。とくにおすすめる文献ではないが、日本での用語を選ぶときに、文字の使い方の参考にはなる。例えば、*abortion* 敗育, *telome* 頂枝, *lenticel* 皮孔, *zygote* 合子, *abundance* 多度, *vicarious species* 替代種, *tetrad* 四合花粉, *shoot* とする用語は議論が多くて決めかねたと序文にある。(金井弘夫)

□巨理俊次: 芝棟—屋根の花園を訪ねて— 302pp. 1991. 八坂書房. ¥4,200 (+送料).

著者によれば、芝棟は民家建築に普通な草葺屋根の棟の一形式で、植物を植え、根を張らせて棟の固めとする手法の総称である。本書は、趣深い芝棟の姿にひかれた著者が、研究の傍ら半世紀近い歳月をかけて日本各地を探訪して得た資料を基礎に集大成されたものである。

本書は2部からなる。第1部は総括篇で、芝棟研究の発端と本書のあらまし、草葺屋根の葺草、屋根の花園に見られる植物、芝棟の衰退と絶滅、芝置屋根の5章からなる。第2部、芝棟探訪篇では日本中部を中心に全国の芝棟の実際が記されている。

いまでは芝棟は草葺屋根の大幅な衰退により、希少な存在となってしまい、本書はかつて各地に

普通に見られた芝棟の記録となってしまった。その意味で本書は、他に類書のない芝棟についての学術上の貴重な資料である。

本書を読んで、芝棟に用いる種が多数あったことに目を見張った。また、地域ごとに共通性が高いことも面白い。ベンケイソウ科植物は著者も芝棟に多い植物として、特別に取り上げているが、メノマンネングサやイワレンゲの急速な減少は芝棟の衰退に関連があるだろう。中国では、飛び火防止にイワレンゲ属植物を屋根に植えると古い記録にあるが、芝棟でも同属は普通な植物のひとつであったことが読み取れる。

著者の長年にわたる探訪の記録は、すぐれた植物紀行文になっている。自然と調和したありし日の日本の村々の様子をそこに見るおもしろい。

(大場秀章)

□矢島道子: 地球からの手紙 171pp. 1992. 国際書院. ¥1,200 (+送料)

本書は植物を直接に取り扱ってはいないが、自然史を中等教育のレベルでどのように取り上げるかで示唆に富むところが多いので紹介した。著者は、1981年に東京大学大学院で学位取得後、成徳短大附属高校で教育に携わっている。

著者が研究対称としたミジンコを中心にすえ、分類と系統進化、それが研究されてきた課程、標本の意義、さらにはミジンコの生態などが体験を基礎に簡素かつ平易に、高校生に語りかけるように書き表されている。その記述は文字で漫画の画面を追うようだ。

著者はまた将来研究に志す若者を切望するが、誘惑するだけでなく、「研究とか調査とかはある程度単純な繰り返しを含みます。決してすぐにおもしろい結果がえられるとは限りません。」という指摘も忘れていない。理科教育あるいは初等教育に携わる読者に推薦したい。(大場秀章)

□Corner, E. J. H.: *Botanical monkeys* 55 pp. 1992. The Pentland Press Ltd., Durham. £12.5(+5.25, postage).

著者さんは、日本でも著名な熱帯植物などの研究者であり、本書はCornerさんが書いた